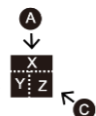


複合化・多機能化

- ・多目的が無目的に変わってはいけない。コンセプトを持つことが大事
- ・会議用の会議室ではなくて、演出準備と会議両方使える部屋がほしい
- ・コンベンションと文化芸術のバランスをどう設定するか
- ・単に集約化して一つの施設に詰めるのではなく、機能の相乗効果が生まれるよう、それぞれの役割を再定義することが重要
- ・市内の既存施設や、周辺市町村も含めた役割分担を考える必要がある
- ・普段使いやコンベンションなど、様々な形で「人が集う」施設



コンベンション

- ・3,000人規模のコンベンションが開催できれば、地域の活性化につながる
- ・大小問わず10室程度の会議室に加え、可動式の間仕切り機能や、中継をつなぐことのできる会議機能があると良い
- ・現施設周辺にはシティホテルが4つあるので、新文化会館でコンベンションを開催した後、懇親会の利用も促すことで相乗効果を狙える
- ・どの立地であっても、コンベンション機能を内包する文化施設であることが旭川全体のまちづくりや地域の活性化に貢献できる
- ・活動が見えるオープンな会議室と、しっかりと区切られているクローズな会議室の両方あると良い



予算

- ・イニシャルコストは、1,500席の大ホール単独施設で100億円程度、1,800～2,000席の大ホール＋会議室等で130～150億円程度、アイデアを全て実現しようとする200億円以上になると見込まれる
- ・可動式のホールはイニシャルコストとランニングコストの両方でお金がかかり、音響的にも有利にはならない
- ・飲食機能を入れる際に、収支を合わせるための工夫が必要になる
- ・予算を踏まえても、規模よりも機能を優先すべき



ついで利用

- ・他の用事で行ったついでに何かを見られる等、何かのついでに立ち寄れるような施設
- ・知人や家族の作品が展示されていても、多くの人を訪れるような場所でなければ展示を見に行くことがなく、施設の「ついで利用」にもつながらない
- ・飲食がついで利用で最も使用される機能であり、必ずほしい



交流

- ・旭川で芸術分野に従事する有識者の方々と相互につなげる文化会館の在り方が必要
- ・文化会館が子どもたちと芸術家をつなぐ場所になってほしい
- ・文化会館が音楽活動をしている人々やスポーツ等他の分野の活動を行っている人々もつなぎ、融合する
- ・お互いが寄り集まった時に素敵だと共感できるような場所にしたい
- ・創造するものと享受するもののバランスが取れると良い
- ・世界的なアーティストの演奏をみて感動するばかりではなく、自分達もそのレベルまでできるようになりたいという刺激になるような体験ができれば良い
- ・「人が集う、夢と感動のある空間」



市民参加

- ・デザインコンペを行うなど市民の意見を形に取り入れることで、市民の理解が得られる
- ・市民中心の施設であってほしい。幅広い文化活動が発表できて交流できるような場であってほしい

日常的な利用

- ・おのずと人が集まるようなエントランス広場
- ・飲食・おしゃべりが可能など居心地良い場所づくりが市民との距離を縮める
- ・常に人が来るような機能を同居させることで、場所やイベントの存在を知りきっかけを生み出す
- ・施設自体に価値があることで日常利用を促し、公演時にも来てもらう
- ・日常的な利用をしてもらい市民の文化芸術を育てていくような施設が理想
- ・オープンカフェのようなふらっと立ち寄れる空間づくり



インクルーシブ

- ・年齢や性別、身体能力によらず誰でも立ち寄りたい居場所とすることが大事
- ・従来のアプローチを打破し、視覚・聴覚障害のある方が芸術を楽しめるデザイン
- ・子どもたちにとって文化会館が馴染みのあるものであってほしい
- ・普段からホールを利用している人だけでなく、全ての人が気軽に入りやすい透明性のある外観が好ましい
- ・車椅子でも使いやすい駐車場やトイレが良い
- ・エントランス空間から各機能が全て一望でき、簡単にアクセスできると良い
- ・勉強スペース等を設け、若い世代も利用したくなる施設にしていきたい
- ・静かな空間とにぎやかな空間をゾーニングで分け、誰でも気軽に利用できる施設にしたい



積層型

- ・積層する場合、上下階の相互交流を保ちつつ、用途で分けられるような工夫が必要
- ・ホールを高層化することで、道路の振動やサイレンなどは伝わりにくくなる
- ・積層型は上下階でイベントを明確に分けられるメリットと分断してしまうデメリットがある
- ・積層型は混雑時に狭隘さを感じるため、安全確保に留意する必要がある
- ・積層型で高さのある建物にすることで展望台を設けて街全体を見渡せるような工夫も考えられる



シンボル性

- ・ランドマークになるような施設
- ・どの建築家が建てたのかもステータスになり得る
- ・ホールの規模や機能に関わらず、演奏することに価値やステータスを見い出せる施設になれば良い
- ・札幌だけでなく、旭川にも行きたいと思ってもらえるような機能やシンボル性があることが理想
- ・文化エリアの象徴となる建物にするというのも大事
- ・デザイン都市と銘打っているからには、そのシンボルとなるような建物にしたい



旭川らしさ

- ・新施設の魅力を道北の自然とセットで感じてほしい
- ・既に札幌にあるホールと同程度の規模・補完的な位置付けの施設ではなく、独自性を持った施設であることが良い
- ・木をふんだんに使うような旭川らしい施設
- ・ホールの音響面でも木を使うことは相性が良い
- ・単純に格好良いだけでなく、地域に根ざしたデザインだと市政を表現する上でも良い
- ・中心市街地が空港から近いことや、現文化会館中心にコンベンション機能や宿泊機能が徒歩圏内に収まっていることが魅力
- ・旭川家具や旭川の木彫りを使った壁などで旭川らしさを高めると良い



文化醸成

- ・旭川市は芸術のレベルが高く、それを大切に育てていくことが重要であると考えているので、コンセプトとして「文化芸術」を推したい
- ・文化芸術のための施設よりも、旭川全体のまちづくりに貢献する施設の在り方が望ましい
- ・敷居の低い施設でないといけない。文化の度合いや、身近なイベントが気楽にできる空間であってほしい
- ・「響き合う文化芸術」



ライブラリー・ギャラリー

- ・展示室で展示のない時の利活用を考えたい
- ・展示室は最低でも今の広さが必要
- ・個展やグループ展が可能な中規模の展示会場が旭川市にはないことを踏まえ、展示機能の規模を考える必要がある
- ・コンベンション等にも使いやすい部屋の構造・配置であることが良い
- ・図書館、飲食、椅子など様々な機能があり、目的がある人もない人も利用できる施設であることが良い
- ・コンベンションの際にはギャラリースペースを企業展示スペースとしても利用できる
- ・図書館や美術館の分館としての機能を持たせるのも良い



屋内型パブリックスペース

- ・北海道では冬季間、屋外スペースが機能しなくなる
- ・屋内型広場があれば冬季に室内で待つことができる



アクセシビリティ

- ・子どもを持つ親としては屋外スペースにゆとりがあると入りやすい
- ・人や車の動線が重要。現施設周辺には駐車場はあるが、渋滞に巻き込まれやすい

立地・敷地

- ・近くで消防車のサイレンが鳴ることは、ホールを建てる際に懸念すべき
- ・現施設周辺にはシティホテルが複数あり、コンベンションや懇親会に対応可能
- ・神楽地域に立地を仮定した場合、国際会議場やレセプション室を備える
- ・大雪クリスタルホールと連携できる場所であることが良い
- ・ホテルとのつながり等、エリア全体の動線が大事
- ・コンベンション機能や宿泊機能が徒歩圏内に収まっていることは、ホール自体の魅力にもつながる



ホール機能

- ・演奏家としてこのホールで演奏・レコーディングしたいと思える音響設備
- ・客席数を可変式にするなど、現在公会堂が担う中ホール機能の継承も考える
- ・中ホールや小ホールは避難所としても使えることが良い
- ・本番前の練習の時点で、良さが伝わるようなホールであることが理想
- ・搬入口の動線など、バックヤードの使い勝手が大事
- ・現市民文化会館の1,500席で足りているが、座席の間隔が狭いことが不満点
- ・リハーサル室を作るなら、大ホールのステージと同等以上の面積としてほしい



道北の中心としての施設

- ・道北における文化の大きな基盤
- ・文化芸術を担っていく道北エリアの拠点でありたい
- ・周辺地域においても規模が大きい催事は旭川でやりたいと思われていると考えられるし、自分達もそうありたい

余白空間

- ・ホール以外の公共スペースを広く造ってほしい
- ・メイン機能以外の空間を広くとることが最近の文化施設の傾向である
- ・ギャラリーや中ホールと一体的な利用ができる空間にしたい
- ・通路の中に滞留できる空間があると、にぎわい生まれる
- ・エントランスに中庭や図書スペース等を設置し、一つの大きな空間を様々な機能を持った場として区切ることで、楽しく移動・滞在できる空間にしたい
- ・屋外スペースと一体的に利用できるような余白空間